



関西学院大学災害復興制度研究所ニュースレター

# FUKKOU

Vol.49

## contents 目次

- 巻頭言  
マダガスカルと共に  
/ 栗田匡相 ..... 1
- 2023年復興・減災フォーラム  
関東大震災100年われわれに遺した  
もの～帝都復興と人間の復興..... 2
- 所長対談【復興のカタチ】  
梶谷真司×山泰幸..... 3
- 緊急座談会  
韓国ソウルの群衆事故〈梨泰院惨事〉  
をめぐって / 山泰幸..... 4
- 報告  
減災と災害復興へ向けて科学と実践の  
すき間を埋める—国際総合防災学会  
(IDRiM Society) ならびに日本都市  
計画学会九州支部 創立30周年記念リ  
レーンポジュームに参加して  
/ 岡田憲夫 ..... 5
- 報告  
災害遺構の活用を考える—桜島の大正  
大噴火の黒神埋没鳥居を訪ねる  
/ 山泰幸  
桜島防災に関する地域との協働活動  
/ 大西正光 ..... 6
- 観感学楽  
のだむら星空映画祭 / 宮前良平  
私を含め大学生にとっての防災  
/ 前田蒼太郎 ..... 7
- 復興しらべがき  
日本災害復興学会 会員募集中!!... 8

## マダガスカルと共に

災害復興制度研究所運営委員  
関西学院大学経済学部教授  
**栗田 匡相**



「私が出会った大家族がいる。一番下の子だけが、男の子であった。その夫婦は、男の子が生まれるまで子供を作ったという事を教えてくれた。マダガスカルでは、まだまだそのような事が起こるという事を肌で実感した。さらに、生活が厳しいにも関わらず、子どもが沢山いる為、1日に1度しかご飯を食べることができない。そして、今後が不安で、両親は夜に何度も起きてしまうという。しかし、彼らは、私に笑顔で接してくれる。英語を教えてほしいと、one, two, three...と書かれた、英語の早見盤を持ってくる。BFCの教科書（栗田ゼミ生が独自に作成した本）を見て嬉しそうに私に話しかけてくれる。折り紙を作って見せれば真似をして作ろうとする。彼らと関わることができてうれしいはずなのに。胸が締め付けられる。無力さを感じた。こんなにも、勉強をしたいと思っているのに。食べ盛りで、ご飯だって沢山食べたいはずなのに。彼らのために、今すぐ直接的にできることはなかった。お金を渡すことも、ご飯をわたすことも。ただ、日本から持って行った折り紙を渡し、目をみて話を聞くという事。言葉は、わからないけれど、彼らの目を見たいと思った。見なければならぬと思った。そのころには、ズボンの汚れなんて気にせず、膝をついて目を合わせた。手を握った。温かかった。」

上記は、2022年の8月に世界最貧困国家の一つであるマダガスカルの農村でホームステイや過酷な調査に参加した学生の感想だ。農村で暮らす多くの子ども達が慢性的な栄養失調状態にあるという毎日が災害のような状況に触屏してしまった私の教え子は言葉を失い、彼らの目を見つめ、そして手に触れる。

災害からの復興を語るとはということなのか。毎日の災害をどのように生き抜くのかということにマダガスカルの家族は生活のほとんどを奪われてしまうし、学生同様、私自身だって彼らのその先の未来を描けずに言葉を失う経験をこれまで何度もした。我々に言葉を持つことの出来ない地平、言葉の無意味さを認識させるのが災害なのだとしたら我々が語る言葉とは何だろうか。

でも、被災した人々のそばに寄り添い、手に触れ、時間をかけてそこに一緒にいることで、世の中がどのように変わることが出来るのかを教えてくれるのも災害なのかもしれない。ただ、レベッカ・ソルニットが言うようにそれは決して楽観的な見通しではない。見る可能性を超えたものを見るのが耐えられないものを、思考の可能性をこえたものを見ることになる。それでも我々は災害に向き合い、復興を語る。世界のその先の可能性を日々の領域に引き込み、人々と共にあるために。

# 2023年復興・減災フォーラム

## 関東大震災100年 われわれに遺したもの ～帝都復興と人間の復興

オンライン同時開催

関東大震災では、「帝都復興」の掛け声のもと都市計画一區画整理という都市再開発の手法が初めて実践された。このような復興の考え方は問題を抱えながらも現在に至るまで根強く引き継がれている。一方、これに対して、本研究所の理念としている「人間の復興」という被災者中心の考え方も提起された。さらにキリスト者や学生によるボランティア、関西への文化の伝播、被災者らの広域避難、そしてヘイトクライムという負の遺産まで、わが国の歴史に刻んだ。我々に遺されたこれらの産物をどう整理し、今後の災害復興に生かしていくべきなのか。「復興」という言葉が社会的に重要な意味を帯びて語り出された関東大震災から100年の節目に、あらためて「復興」について考えたい。

1/7

Saturday

関西学院会館 レセプションホール

兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

13:00～17:30

### ◆全国被災地交流集会「円卓カフェ」

関東大震災100年、あらためて『復興』を語り合う

所長の山泰幸が長年地域で実践を重ねてきた「哲学カフェ」の形態で「円卓カフェ」として実施予定。「哲学カフェ」とは、フランスのパリが発祥で、毎週日曜日の朝、カフェに人々が集まってコーヒーを飲みながら、自由にいろいろなテーマを議論する場のことで、現在、日本各地で開催されている。今回は、「復興」という言葉が重要な意味をもって語り出された関東大震災100年の節目に、哲学カフェ方式で、あらためて「復興」について語り合うことにしたい。

【第1部】研究者が「復興」に関わるとは

【第2部】被災者・支援者にとっての「復興」

【第3部】全体討論会

司会・山 泰幸（関西学院大学災害復興制度研究所長・人間福祉学部教授）

1/8

Sunday

関西学院会館 レセプションホール

兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

13:00～17:00

### ◆シンポジウム

〈敬称略〉

●特別講演 今どこでも起きうる災害の復興を先人たちに学ぶ  
～賀川豊彦とその妻の関東大震災～  
玉岡 かおる（作家）

●基調講演 歴史の陰翳と人間復興  
中島 隆博（東京大学東洋文化研究所教授）

●パネル討論 関東大震災100年、あらためて『復興』概念を問い直す

《パネリスト》

中島 隆博（東京大学東洋文化研究所教授）  
山中 茂樹（関西学院大学災害復興制度研究所顧問）  
杉浦 秀典（賀川豊彦記念松沢資料館副館長・学芸員）  
趙 寛子（ソウル大学日本研究所副教授）

《コーディネーター》

山 泰幸（関西学院大学災害復興制度研究所長・人間福祉学部教授）



【主催】 関西学院大学災害復興制度研究所

【共催】 日本災害復興学会 【後援】 朝日新聞社

※新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、会場への入場制限を実施したうえでの開催となります。また、新型コロナウイルス感染拡大の状況等により、急遽開催方法が変更になる場合等がございます。



## 所長対談

# 『復興のカタチ』

語り手：梶谷真司先生 聞き手：山泰幸所長

(東京大学教授・共生のための国際哲学研究センター長)

**山** 「哲学対話」の取り組みで、たいへんご活躍されていますが、どのような経緯で始められるようになったのですか。

**梶谷** ハワイで「子どものための哲学」を見学する機会があり、子どもたちがとても楽しそうに話をしながら、非常に哲学的なテーマを考えている、その姿に感銘を受けて、日本に帰ってから自分でもやるようになりました。

**山** 日本では、最初はどのように始められたのですか

**梶谷** 大人がやっても楽しいはずだと思ったので、「philosophy for Everyone」という、みんなのための哲学・哲学を全ての人のために、というイベントをやったんです。初めてでしたし、まだ東京でもあまり知られていなかったのですが、センターのホームページに載せただけで、80人も来たんですね。しかも半分以上が女性で、若い人からお年寄りまでいて、それまでとは客層が全然違うわけですよ。ものすごく大きな何か…海を見つけた！と感じましたね。

**山** どんなやり方をするのでしょうか。

**梶谷** 基本的には、輪になって座って、何か一つ問いを決めます。みんなで問いを出しあって選ぶ場合もあるし、最初から決めている場合もあります。必ず何らかのルールがあるのですが、私は8つ決めています。1)何を言ってもいい。2)否定的な態度をとらない。3)しゃべりたい時にしゃべったらいい。4)質問をお互いにする。5)知識ではなく自分の言葉で自分の経験に則して話す。6)まとまらなくてもいい。7)意見が変わってもいい。8)わからなくなってもいい。わからないことが増えるのは、考えることが増えて非常に良いことだと。そうすると、みんな自由にどんどん安心してわからなくなって、どんどん楽しくなるんですよ。

**山** 先生のお話を聞いていると、どこでもみんな自由に話しているように感じるのですが。実際、そうなんですか。

**梶谷** 「うちの生徒は引っ込み思案だからしゃべらないと思いますよ」とか、「うちの村の人たちはみんな恥ずかしがり屋だから、東京みたいにうまくいかないと思いますよ」って、なんか失敗を期待しているかのように言われるんですね。だけど、今まで一度たりともうまくいかなかったことはないですよ。む

しろ普段しゃべらない人が、生き生きとしゃべるんです。だから、学校の先生が「あの子の声を初めて聞いた」と言うことがよくあるんですよ。村でも、普段しゃべらない人がよくしゃべって、しかも非常に良い意見を言うことがよくありますね。

**山** 近年、大学の地域貢献が強く求められていますが、地域に関わるのが苦手な研究者は多いですし、なかなかうまくいかないですよ。

**梶谷** そうですね。「何かしら専門的知見を生かして地域に関わらなければいけない」と身構え過ぎなんでしょう。専門家として地域に関わる必要はなくて、ただの人として行けばいいと思うんです。普通に人間同士として話をするなかで、もし役に立てることがあれば、やりましょうということですね。心がけているのは、“自分のテーマとか自分がやりたいことを可能な限り持ち込まない”ことですよ。向こうが「こういうことをしてほしい」と言ったら、その中で一緒にやれることを詰めていく感じでやっています。あとは、その地域のことを勉強していかないようにしていますね。何もわかってないド素人みたいな感じで行くと、地域の人たちが「あっそれってなぜなんだろう」と考えてくれるので、むしろそのことが大事だと思っていますね。

**山** 最後に、研究所の活動について、アドバイス等をいただけますでしょうか。

**梶谷** 災害や復興というテーマは、いろんな人たちが真剣に関わることができるテーマですし、専門家も理系文系かかわらず関わることができるという意味では、すごくいいテーマだと思います。また、国際協力や交流もできるし、すごく懐の広い、深いテーマだなと思いました。ぜひ本気で一緒に何か取り組んでいけたらいいなと思っています。

**山** たいへん力強いお言葉をいただきました。今後、ぜひ先生の研究センターとも、いろんな形で交流等させて頂ければと思います。本日は、ありがとうございました。



# 韓国ソウルの群衆事故 〈梨泰院惨事〉をめぐって

関西学院大学災害復興制度研究所所長

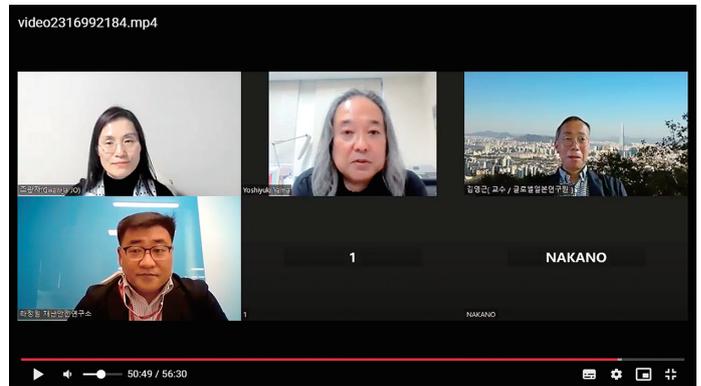
山 泰幸

2022年10月29日の夜、若者が多く集まる韓国ソウルの梨泰院にて発生した群衆事故をめぐって、日本においても連日報道がなされており、大きな衝撃をもって受け止められている。本研究所では、2022年11月8日、韓国から3名の識者を招いて、オンラインによる緊急座談会を開催した。座談会の出席者は、ソウル大学校日本研究所の趙寛子教授、高麗大学校グローバル日本研究院社会災難安全研究センター長の金暎根教授、全国災害救護協会災難安全研究所の羅貞一副所長、司会は筆者が務めた。

まず、羅貞一副所長から、事故の概要や政府の対応について現状報告があった。156名の犠牲者があり、そのほとんどが20代から30代の若者であり、女性は100名以上であった。負傷者はそれ以上にのぼる。これほどの大きな規模の惨事は、2014年のセウォル号沈没事故以来であり、また犠牲者の層も重なっているため、セウォル号沈没事故と関連づけて受け止められており、社会的衝撃は大きい。羅氏自身、当初は、突然の悲劇にただ悲しいという気持ちであったが、現場を何度も訪れるにつれて、なぜ多くの若者が死ななくてはならなかったのかと、次第に強い怒りが込み上げてきたという。また、国の対応としては、哀悼期間を設け、梨泰院を特別災難地域に指定し、亡くなった方に約200万円、葬儀費用に約150万円を支援しているが、これには国内にも賛否がある。遺族や負傷者、現場にいた者だけでなく、SNSで動画が拡散され、それを見た者たちが、精神的苦痛を訴えており、ソウル市でも無料で225カ所の心理支援の施設を設けており、国からも全国民が心理支援を受けられるようにしている。全国災害救護協会でも、ヒーリングバスを用意して心理的支援を行っている。また、葬儀場に飲用水などを提供する活動を行っている。

金暎根教授は、2001年の明石花火大会歩道橋事故や1995年の阪神・淡路大震災、2011年の東日本大震災などを例に挙げて、日韓の比較の視点から災害対応の違いについて言及した。特に、「事故」なのか「惨事」なのか、「死亡者」なのか「犠牲者」なのか呼称の問題から、政府の責任回避の姿勢を指摘し、今回の一連の政府・自治体・警察などの対応に、危機管理システムの不備を指摘した。また、グローバル化のなかで、犠牲者のなかに日本人2名を含む外国人が複数含まれていたこと、これには韓流文化の世界的流行が影響しており、そのため海外メディアの反応も大きく、国内だけで対応できる問題ではなく、国境を越えた災害対応の必要性を指摘した。

趙寛子教授は、哀悼期間が終わり、政府の危機管理システム



の不備が厳しく追及され始めているが、国民が目前の危険に対して、いかに行動すべきかについての安全意識を十分に備えていない点にも問題があると、国民みんなが安全に責任を持たなければ、再発防止につながらないと指摘した。また、現代の若者の生きづらさとそれをもたらしている現代教育のあり方の問題についても指摘があった。セウォル号以来の惨事を政争の具にしようとする動きがあるが、むしろ、今回は、国民が自分たちの社会が抱える根本的な問題に気づく契機になるのではないかと述べた。

その他、個人の責任と国家の責任にはそれぞれ違いがあり、今回の惨事は、やはり国家が果たすべき責任を果たしていないのではないか、一方、国家は国民一人一人によって構成されており、国民みんなが責任を感じなければ、政府の責任を追及するだけでは、同じ悲劇が繰り返されるのではないかと、そのためには教育の役割が重要ではないか、などの熱心な議論がかわされた。

筆者自身は、「象徴的復興」という考え方を提唱し、復興感を実感させる「復興儀礼」の役割を指摘しているが、今回の惨事は、コロナ禍からの復興感とハロウィンという現代的な祭りとの関係からも検討すべきと考えている。

被災者中心の「人間の復興」を理念とする本研究所では、2016年1月より、「東アジアの新たな協働を考える」をテーマに、毎年、東アジアの研究者を招いて、復興知の共有を目的として、シンポジウム等を実施し、自然災害のみならず、人為的事故や今般の感染症を含む、広く社会的惨事からの復興について議論を重ねてきた。今回の緊急座談会もその一環であり、今後の事態の推移を見守りながら、あらためてシンポジウム形式にて、この問題について取り上げる予定である。

# 減災と災害復興へ向けて科学と実践のすき間を埋める

国際総合防災学会 (IDRiM Society) ならびに日本都市計画学会  
九州支部 創立30周年記念リレーシンポジウムに参加して

災害復興制度研究所顧問

岡田憲夫

## 1 〈科学と実践のすき間〉に橋を架げるための科学者の挑戦

私は最近、国際総合防災学会 (IDRiM Society) と日本都市計画学会 九州支部 創立30周年記念リレーシンポジウムに参加した。前者は国際学会で、二つの特別セッションの企画と実施に私自身が主導的に関わった。なお山泰幸所長はそのうちの一つの特別セッションの共同提案者として参画された。後者は小さなシンポジウムであるが、2時間ほどのセミナーでコメンテーター的役割を務めることが求められた。興味深いことに、いずれの学会でも、参加者が一様に『減災と災害復興へ向けて科学と実践のすき間を埋める』ことを真剣に議論していた。減災と災害復興の問題はそのような「すき間」を突いていくことは、たとえば阪神淡路大震災や東日本大震災、最近の豪雨災害などからも明らかである。

## 2 IDRiM 2022 (2022年9月21日～23日 ルーマニアが主催地のところコロナ禍のため online 開催となった。)

<http://idrim2022.com/>

以下の二つの特別セッションについて簡単に紹介する。

### 1) Special session 8: 「科学と実践のすき間」を問う

(提案者 岡田憲夫、Robert Goble (Clark Univ. USA) 他)

上述した「科学と実践のすき間」を implementation gap (IG) と呼ぶことを提唱した点がまず特徴である。減災と災害復興のための実践に資する科学知をIGと見なして学際的、系統的に紡いでいくにはどうしたらよいかを議論した。岡田、Gobleらがconcept paperを作って discussantsに予め読んでもらい、コメントや疑問点を出してもらった。次いで参加者らの意見や質問も受けて、質疑応答をした後、課題抽出をした。

減災や災害復興に関わるIGを具体的に議論するには、たとえば、どのような災害を対象にしているのか、どこにIGが存在すると考えるのか、何が分かっている、何が分かっているのか、どのようにIGに橋渡しをしようとするのかなどについて、予め枠組み設定 (framing) が必要である。このような枠組み設定はある意味で、模造紙のような白紙を用意することに見立てることができる。IGに橋渡しをしていくプロセスを科学知として認識し、記述・記録し、系統的に集積していくことが本質的なテーマになるのではないかと。それはある意味出発点を決めて、次々と立ち現れるIGに橋渡しをする科学的で実践的探訪とみなせる。それはIGに橋渡しをする地図づくり (mapping) と言えるのではないかと、などが論点となった。

### 2) Special session 11: 実フィールドから、自然科学者と社会・人文科学者が対話でIGを埋める挑戦

(提案者 山泰幸、岡田憲夫)

上述1)のsessionと連携して、「科学と実践のすき間」(IG)を取り上げた。ここではIGが自然科学者と人文科学研究者との間に存在することに着目した。そこに橋を架げるためには、小さな取り組みから始めて、双方が自然な対話を重ねるコミュニケーションの場づくりが不可欠であることが指摘された。話題提供として山所長が徳島県東みよし町の哲学カフェの事例を、私が鳥取県智頭町のまちづくりの事例を紹介した。また両者のアプローチが一見まったく異なるように見えるものの、本質的には両者は創造的で戦略的な地域復興まちづくりとして根底で通じるものがあることを説明した。discussantsから論点を掘り下げる有益な質問とコメントをもらった。参加者からも多角的な視点からの質問と提案があった。来年以降も、このようなコミュニケーションの場づくり(「コミュニケーション・スペース」のデザインの知)の議論を重ねていくことになった。

### 3 日本都市計画学会九州支部 創立30周年記念リレーシンポジウム

2022年9月20日に熊本市で開かれた。テーマは、「市民による熊本の復興まちづくり」であった。熊本地震や球磨川水害からの復興において、市民や民間の立場で活躍されてきた方々からこれまでの活動が紹介された。岡田は、各自の取り組みについて短いコメントをした。すべての取り組みに共通していることで感銘を受けたことがあった。「壊滅的な災害からの地域復興」には、「根本的な発想転換」と「住み続ける意味を問う」ことから地域の変革を図ろうとしていることである。これは上記の「創造的で戦略的な地域復興まちづくり」と符合している。今後の災害復興研究には、このようなコミュニケーションの場づくりの研究がいかに重要かを実感した。



# 災害遺構の活用を考える

## 桜島の大正大噴火の黒神埋没鳥居を訪ねる

関西学院大学災害復興制度研究所所長

山 泰 幸

桜島の大正大噴火から100年以上が経過し、近い将来、大規模噴火が起きるとされ、これにいかに対応するかが喫緊の課題となっている。しかし、大噴火を実際に経験した者でなければ、大量の軽石火山灰の降下によって引き起こされる困難な状況をイメージすることは難しい。行政の対応も遅々として進まない。こうしたなか、京都大学防災研究所の大西正光教授を代表とする共同研究の研究分担者として参加し、昨年2021年11月以降、事前避難に向けての住民ワークショップ等の開催のため数度にわたり鹿児島を訪れている。現地での活動を通して、その重要性を改めて認識したのが、災害遺構の役割である。

桜島の黒神地区の腹五社神社には、大正大噴火の軽石や火山灰で埋め尽くされ、鳥居の上部だけが地上に出ている「黒神埋没鳥居」がある。当時の村長の英断で、後世に噴火の記憶を伝えるために、噴火直後の姿が、そのまま残されることになったという。

地面から突き出た鳥居の姿を初めて見た者は、そのあまりに異様な光景に、ギョッとするのは、間違いない。軽石火山灰が大量降下した現場をまざまざと見せつける、リアルな姿が残されている災害遺構は珍しく、その価値は非常に高い。しかし、現状は、簡単な説明版があるとはいえ、十分に活用されているとは言い難い。

研究メンバーの京都大学防災研究所の井口正人教授は、降り積もった軽石火山灰の「深さ」を実感できる工夫が必要であると述べる。それによって未経験の大量降灰をイメージできれば、事前の避難行動にもつながっていくというわけだ。近い将来の大噴火に備えて、早急に、より効果的に活用する方策を講じるべきだ。世界的にも貴重な黒神埋没鳥居を災害遺構として、しっかり整備を進めていけば、災害遺構を活用した実践研究の拠点にもなるはずだ。

現在、桜島は日本ジオパークに認定され、地域づくりに取り組んでいる。黒神埋没鳥居は桜島の魅力をさらに引き立てる観光資源としての役割も果たすに違いない。



## 桜島防災に関する地域との協働活動

京都大学防災研究所巨大災害研究センター准教授

大 西 正 光

向こう数十年以内に、大規模噴火が発生する可能性が高い桜島を擁する鹿児島では、風向き次第では市街地に大量の軽石火山灰が降り積もると予想される。一方で、桜島では観測施設が充実しており、大規模噴火の予兆を的確に捉えることが技術的に可能である。大規模噴火が発生する前の噴火切迫期において、発せられた警戒情報が事前広域避難等、生命を守るための緊急対応行動に効果的に結びつく体制づくりが急務となっている。

私は研究者として真に地域の防災力向上に貢献するためには、地域防災の住民を主役として研究者自身が、地域の人々とともに学び考える場を設け、そうした過程の中で専門的見地から助言するような関係性を築くことが必要であると考えている。そうした実践的作業仮説を念頭におきつつ、災害復興制度研究所所長の山泰幸教授にも研究メンバーとして加わっていただき、鹿児島市の八幡校区コミュニティ協議会の皆様とともに、これまでに計4回のワークショップをコア活動とした協働実践を行っている。

第1回では、大量に軽石火山灰が降り積もった状況をイメージし懸念事項を自由に語っていただいた。第2回は、頭の中に浮かんだ疑問を自由に専門家に質問し、問題を明確化する機会を設け

た。第3回は、同校区の広域避難先に指定されている南さつま市の現地視察を行った。その結果、参加者は都市部の住民を受け入れるだけの収容能力が不足していることを明確に認識するに至った。第4回は参加者に事前に避難するか、自宅にとどまるかの意思決定をしてもらい、その判断のもとで懸念される事項について考える機会とした。興味深いことに、第2回終了時点では、「事前避難」の選択が多数派だったが、現地視察後は、「自宅にとどまる」との選択が多数派となった。言うまでもなく、これは正しい答えがあるような問題ではない。しかし、こうした思索を通じて、住民、研究者が状況改善の糸口を見いだすことができると信じている。一朝一夕に成果が得られるわけではない。継続こそ力なりである。



ワークショップの様子

観	感
学	楽

かんかんがくがく

被災地を**観**る、  
被災地の痛みを**感**じる、  
そして、  
被災地から**学**ぶ、  
被災地の人たちと**楽**しむ。

## 被災地ネット

のだむら星空映画祭 / 宮前良平  
私を含め大学生にとっての防災 / 前田蒼太郎

## のだむら星空映画祭

福山市立大学都市経営学部講師  
宮前良平

岩手県九戸郡野田村は、岩手県の沿岸北部に位置する人口4,000人ほどの小さな村である。豊かな海に面しており、年間を通じて肉厚なホタテがとれ、秋になれば多くの鮭が下安家川を遡上する。村の東部は雄大な山々が聳え、村内最高峰の和佐羅比山からは、北三陸のリアス式海岸が一望できる。

そんな自然豊かな野田村であるが、村内には映画館が一つもない。映画を観るためには高速道路に乗って1時間半ほど運転しなければならぬ。もちろん、オンラインで映画を観ることはできるが、「映画館」という体験はますます得難いものとなっている。

ここ数年、野田村を舞台、あるいはロケ地とした映画が立て続けに公開された。1つは中野量太監督の『浅田家!』、もう一つは中川龍太郎監督の『やがて海へ届く』である。どちらも全国公開の映画である。しかし、全国で公開されても映画館がなければ肝心の野田村では観ることができない。

そういった中、役場の方の尽力で、上記2作の上映会が2022年9月17日18日に行われた。野外にスクリーンを設置し、夜闇の中、波の音を聞きながらの上映会は昨年からは始まり、今年は「のだむら星空映画祭」と名付けられた(残念ながら今年は強風のため屋内での上映となった)。中野監督・中川監督に加え、両映画のプロデューサーである小川真司さん、そして『浅田家!』のモデルとなった写真家浅田政志さんも来てくださった。両監督に話を聞くと、震災のことを描く上での葛藤があり、また、それを被災地の方々にどのように受け止めてもらえるかという点

で大いに緊張したようだ。

震災のことを真摯に描いた映画が被災地に届けられることはとても素晴らしいことだと思う。野田村の小田村長は言う。野外上映会を行う場所は、今は公園だが、昔は多くの家々があった。そこには野田の人びとの生活の営みがあった。そのことを忘れないでほしい、と。映画に描かれる震災を通じて、映画では描ききれない、震災前の日常を透かし見ることができるかもしれない。そんな映画祭が永く続きますように。



◀ 昨年度の野外上映会の様子

から親しみを持ち、いざとなった時にそこでできるコミュニティをサポートすることができるように「前提」がすぐ回復するように設計したりすることはできる。少なくとも大学という評価基準の中では防災を重視した案がデザインを重視した案に負ける可能性は非常に高いが。

学生のボランティア団体に所属している身としては、防災イベントを開催し、それを少なくともまず友人たちに体験してもらうことはできる。実際、今年の9/1には団体内向けではあるが、防災ゲームを楽しんだり、防災食を食べたり、防災グッズをクラフトしたりする防災DAYというイベントを開催した。友人たちの「前提」の喪失を少しでも抑え、また友人とその周りも含めた「前提」の回復が少しでも早くなれば嬉しい。

一人の大学生としては、被災した時の行動をいつでも引き出せるように頭の片隅に準備しておくことや機会を見つけ被災地で復旧の手伝いをすることくらいしかない。

何ができるかは想像すれば自ずと見えてくる。

しかし、大学生は多忙だ。建築学部は毎週模型を作って評価される。青春だって満喫したい。自分でお金を稼ぎたい。趣味を楽しみたい。色々な人と繋がりたい。そんなすべきこととしたいことに囲まれ、わからないことだらけでたくさんある。私は不器用だから、建築学部の教授の言う通りにすればいいことになって、理由を追求してしまう。世間様に歯向かって生きているようなものだ。そんな「前提」の上では防災や災害は目の届かないところに行ってしまう。

これはできていないことに対するただの言い訳にすぎない。今この瞬間も知っているのに見て見ぬふりをしてしまっている自分がいる。

ではどうすれば、私たちは災害ボランティアを行い、そこを糸口にして防災に対する意識を高められるのか。私の場合、以前ここに記事を投稿していた植田隆誠先輩に災害ボランティアに誘われた。自分で行こうよりも誰かに行こうと誘われる方がハードルは低くなる。

今後の課題としては何か起きた時、楽に誘えるような準備を今のうちからしていくことだと思う。

## 私を含め大学生にとっての防災

関西学院大学災害コミュニティむぎ  
建築学部2年

前田蒼太郎

日本は恵まれた国だと思う。ほとんどの人は学校に通えているし、食べるのに困ることもない。少なくとも私の周りはそのようだ。日常というのは刺激もなく、ただ流れ過ぎ去っていくものでしかない。ただそこに当たり前にあると思ってしまふ。しかし、被災すると、急に日常は取り払われ、これまで生きてきた「前提」が失われる。

災害に対して私ができることは少ない。

建築学部としてならば、耐震、耐水性、耐火性を備えた建築物を設計し失われる「前提」を少なくしたり、公共空間(公園or避難所となりうる体育館など)を設計する上で、普段

「後藤君は児玉大将の下でいろいろ進言をされているが、その意見は杉山君から聞いたというよりは、むしろ教えを受けたといってもよいと思う。後藤君が大きい計画をいろいろ立てられているが、それは杉山君の薫陶に基づいたものが多いと思う。杉山君は後藤君のことを、たしか、後藤、後藤と、敬称を省いて呼んでいる。これを以て見ても師弟的關係はわかると思うのです」  
堀内文次郎中将

来年は関東大震災 100 年である。おそらくメディアや都市計画・防災業界は、帝都復興院総裁・後藤新平（1857 年 - 1929 年）を鳴り物入りで取り上げることだろう。ところが、珍しく後藤新平に批判的な書籍を見つけた。2007 年に南窓社から出された『後藤新平をめぐる権力構造の研究』（駄場裕司著）である。冒頭の堀内中将は後藤が台湾総督府民政局長であった当時の総督府副官。日露戦争でも活躍した児玉源太郎大将のもと、台湾、さらには参謀本部でも副官を務めた人物である。ここに登場する杉山とは福岡に本拠を置いた日本初の右翼団体・玄洋社の中心人物、杉山茂丸（1864-1935 年）のことだ。官職も議席も持たない在野の浪人であったが、有力政治家らの参謀役を務め、政界の黒幕とも呼ばれた。ちなみに怪奇幻想の色濃い作風で名高い小説家・夢野久作は長男である。国際法学者の又一正雄は「杉山が立案者、後藤がその実行者という関係であった」と解説。後藤と同時代の評論家で駒澤大学教授でもあった横山健堂（1872 年 - 1943 年）にいたっては、後藤は杉山の「傀儡子」、つまり操り人形だったとまで酷評している。神戸大学名誉教授で歴史学者の山本四郎は「後藤の伝記では、彼を（寺内正毅内閣の）副首相格として描いているが、過褒（ほめすぎ）も甚だしい」と切り捨てる。

後藤新平と言えば、帝都復興の立役者。政治家や都市計画関係者からは「東京を蘇らせた男」「日本の羅針盤」と賛辞は尽きない。だが、本書では帝都復興の骨格となった区画整理事業「焼土全部買上案」について、後藤自身も研究不足でよく理解していなかったらしく、他の閣僚が後藤の説明では理解できなかったため、蔵相井上準之助が噛み砕いた説明で擁護したとする。帝都復興計画が挫折した原因についても帝都復興審議会における枢密顧問官・伊藤巳代治らの反対といった復興院の外部のみに求める従来の通説は疑問で、復興院内部の路線対立にも目を向けるべきだとしている。

さらに、政治家・後藤新平について、反英米主義者で「天皇制ファシズムの先駆的位置」に立ち、国家総動員法などの総動員計画の策定にあたった岸信介（故安倍晋三氏の祖父）ら革新官僚や 2・26 事件を起こした陸軍皇道派を「肅軍」した陸軍統制派の「無意識な先達」であったと分析している。

後藤新平の「虚像」がつけられたのは、後藤の娘婿・鶴見祐輔による後藤伝『後藤新平』（全 4 巻、後藤新平伯伝記編纂会、1937-38 年）が研究者の間で評価が高く、しばしば一次史料代わりに使用されてきた点にあるとする。この鶴見本は「政策決定が不明なまますべてを後藤の功績とする予定調和的な物語となっている」など、いくつか問題がある。後藤家は、戦後、一族から鶴見俊輔ら有力左翼言論人を輩出。さらに、マスメディア企業に転じた後藤系官僚によって、牢固たる「後藤像」が確立された、とする。これらの説は、学界においては少数派かもしれないが、関東大震災 100 年を迎える今、再検証の価値はあるだろう。

（山中茂樹）

★関西学院大学災害復興制度研究所人事

▽主任研究員 斉藤香子（特別任期制准教授） 退職（2022 年 10 月 31 日付）

日本災害復興学会 会員募集中!!

- (1) 申込書送付先 HP(<https://www.f-gakkai.net/>)  
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155  
関西学院大学災害復興制度研究所内  
日本災害復興学会事務局 TEL: 0798-54-6996
- (2) 入会金 3,000円
- (3) 学会費(年額)  
1) 正会員 7,000円      3) 購読会員 6,000円  
2) 学生会員 3,000円      4) 賛助会員 一口: 50,000円

■西宮上ヶ原キャンパス

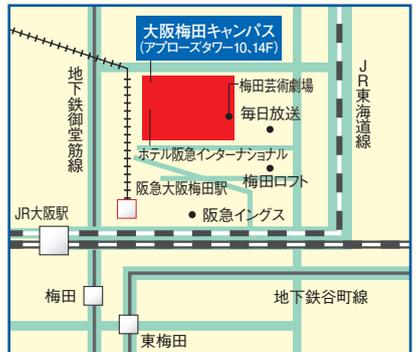
■西宮聖和キャンパス



■神戸三田キャンパス



■大阪梅田キャンパス



阪急大阪梅田駅茶屋町口から北へ徒歩5分

〒530-0013 大阪市北区茶屋町 19-19  
アプロースタワー 14 階  
TEL: 06-6485-5611

■関西学院東京丸の内キャンパス



JR東京駅八重洲北口から徒歩1分

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12  
サピアタワー 10 階  
TEL: 03-5222-5678



関西学院大学  
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY  
災害復興制度研究所

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号  
TEL: 0798-54-6996 FAX: 0798-54-6997  
<https://www.kwansei.ac.jp/fukkou>  
E-mail: fukkou-entry@kwansei.ac.jp